【268】

氏名（本籍）	安藤義道（岐阜県）
学位の種類	博　士（農　学）
学位記番号	博乙第 1,451 号
学位授与年月日	平成10年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	**現代農民のライフ・ヒストリーと就農行動** －「納得論理」型農民教育の創造－

主　査	筑波大学教授	農学博士	佐藤常雄
副　査	筑波大学教授	農学博士	永木正和
副　査	筑波大学教授	理学博士	石井英也
副　査	筑波大学助教授	博士（農学）	加藤衛拡

論文の内容の要旨

わが国の近代農民教育は，農家の長男にスムーズな家業継承を促すべく「説得」の歴史であったが，現在学卒即就農の他にUターン・新規参入など就農形態が多様化し，農民教育の説得論理は失われてきている。現代農民の就農行動は，それとは異質な「納得」論理で，多様かつ個性的である。現代における農民教育は新しい農業者の確保・養成をめざしている。本研究では，農村社会学・農村教育学の観点に立って，農民の就農前，就農後のライフ・ヒストリーの解明を通じて，農民教育の新たな論理を見出すことを課題とする。

日本の農業教育は制度的には「指導者養成」と「自営者養成」，行政的には文部省系統の農学校と農林省系統の農民養成研修施設に分かれる。両者には農民教育の方法論に多少の違いは見られるものの，「農は国の本」といった農本主義思想に裏付けられた農民養成であり，農民を「育てる」という考え方では共通している。他方，戦後の農民教育には農業改良普及事業や社会教育の観点から，農民は「育つ」という考え方の上に立とうとする学習運動があった。近年は庶民の生活史（ライフ・ヒストリー）への関心が高まっている。しかし，農民の就農行動に関するライフ・ヒストリー研究はほとんど見られない。本研究の中心は，現代農民のライフ・ヒストリーの聞き取り調査とその分析にある。個人の生き方を総合的に，農民一人ひとりの個性を重視して，農民の生涯で最も重要な就農行動を実態に即して理解するためである。

日本有数の農業地帯である茨城県を事例として，農民が農業に就き，農業を営む就農行動を中心に，37名の農民のライフ・ヒストリーを検討した。農民の新規就農事情の違いやその後の経営展開，性別や年齢の違いを考慮して，以下のように分類した。学卒即就農の「学卒即農民」，離職就農の「Uターン農民」，非農家出身者で就農の「新規参入農民」，土地利用型の大規模経営を目指す「大規模経営農民」，結婚を契機に就農の「女性農民」，高齢で就農の「高齢農民」である。これらのうち，「学卒即農民」「Uターン農民」「大規模経営農民」は，就農の根底には跡取り長男という共通性がある。しかし，それぞれのライフ・ヒストリーにおける農民一人ひとりの就農動機と農業観は，大きく異なるということである。そのほか，「新規参入農民」「女性農民」「高齢農民」については，より一層多様な就農行動である。

これをまとめてキーワードで表現すれば，学卒即農民では「順応」「反発」「期待」「運命」「研修」「納得」「性格」，Uターン農民では「転職」「計画」「復帰」「決断」「転機」「契機」「反復」，新規参入農民では「興味」「転職」「趣味」「事業」「有機」，大規模経営農民では「選択」「事業」「追求」「競争」「開拓」「使命」「模索」，女性農民では「独立独歩」「夫婦共習」「主婦専業」「他者依存」「夫婦対等」「農外就業」「夫唱婦随」，高齢農民では

「定年退職」「後継不在」「老後趣味」ということになる。このように現代の農民たちは多様な就農の動機や農業観を個人的に形成しつつ，一人ひとり自ら納得して就農しているのである。

農民の就農行動の独自性は，農民が自らの意志で書き記した文学や日記にも表われている。これらの記録資料もライフ・ヒストリーの一つに分類できる。農民作家山下惣一の自分史的小説，高齢農民江橋賢三の「シクラメン日記」と30代の青年農民大島正晃の「作業日記帳」の２つの農業日記から，農民の主体形成と自己形成過程を読み取ることができた。こうした農民の内的な自己形成の重要性を既に大正期に主張し，昭和初期にかけて文学という形で追い求めていたのが犬田卯である。彼はそれを農民文学運動として展開した。

現代農民の就農行動は多様化してきている。その行動原理はかつての農民教育の「説得論理」から生まれたのではなく，農民一人ひとりの「納得論理」によって得られたといってもよい，あくまでも農民自身による自己形成であり，主体形成なのである。これを現代における農民教育の新たな論理にすることが必要である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は，現代における農民教育の方向性について，従来の「説得論理」型のものから「納得論理」型に転換する必要性を明らかにした画期的な論文である。

現代農民の多様性に即して，これまでもアンケート調査に基づく統計的な就農意識研究が行われてきた。また，特徴ある農民の就農行動を詳細に調査した事例研究も見られないわけではない。しかし，本研究は，日本の有数な農業県である茨城県における37名の農民に対する詳細なヒヤリング調査を実施し，個々の農民の就農前及び就農後のライフ・ヒストリーを明らかにするという手法を用いて，また農民作家の自伝的小説や農業日誌を分析して，統計的研究の見落してきた個別性を解明するとともに，事例研究の見過ごしてきた多様な農民の就農行動を貫く論理も同時に追求するものとなっている。ライフ・ヒストリー研究としては極めて多くの農民調査をもとに，これまでの農民の就農行動に関する研究においてマクロ的研究とミクロ的研究との乖離を埋めるものとなっており，この点に本研究の最大の特色がある。ここで本研究が現代農民の就農行動の共通項として抽出したものが「納得論理」である。

総じて，現代の農業高校，農業大学校をはじめとする農業教育・農民教育の行き詰まりを打開する視点について，実際の農民の就農行動をライフ・ヒストリー論の適用によって解明し，個性重視の「納得論理」型教育を提示した本研究の意義は極めて高いものがある。

よって，著者は博士（農学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。